

学びと繋がりを育む 「異文化交流シェアハウス」



SHARE LIFE DESIGN
代表
山本 康弘 (松山市)

◆世界を相手に仕事がしたい

平成25年11月、「シェアライフデザイン」(SHARE LIFE DESIGN) 以下、SLD)と、こうNPOを立ち上げました。その当時は、愛媛大学の国際連携推進機構国際教育支援センターに在籍するルース教授と、留学生生活支援団体CASにて留学生支援をしていた尾崎氏との3人でのスタートでした。

私たちは、ひとつの「課題」を共有していました。愛媛県では、平成4年の時点で147名の留学生が生活をしていましたが、平成25年には446名にまで増えています。それに対し、各大学が用意している宿舍の定員は追いついていませんでした。平成25年の実績では、各大学が受け入れた留学生446名のうち、約130名しか大学が用意する宿舍に入居できていません。つまり、300名以上の留学生は、慣れない土地で、保証人がいない、家財道具もない、敷金・礼金といった日本の不動産慣習もよく理解できないまま、民間宿舍・アパートに入居せざるを得ない状況があったのです。

一方で、私自身、学生時代に短期留学

を経験していました。そこで感じたのは、現地の若者たちの「学びたい」という意欲の高さでした。経済的には決して豊かとは言えない国々の若者たちが、自分の可能性を信じて夢を語っている。それなのに、自分自身にはいったい何があるのだろうか。このままでは、自分も含め、日本人の若者は彼らと対等にグローバル社会で向き合えないのではないか。そんな危機感が芽生えたのでした。もちろん、普段の学生生活の中で触れ合う留学生の友人たちからも、多くの刺激を受けました。

「学びへの意欲がある留学生と、地域



運営ミーティング

の若者が
交流し刺
激し合う
場が作れ
たら……
「世界を
相手に仕
事ができ
たら……
そんな想
いが、社

会人になってからも心から離れませんでした。そんな中、様々なきっかけを経て、ある事業ビジネスが具体的に浮かび上がったのです。それが、「学びとつながりを育む『異文化交流シェアハウス』というひとつの「カタチ」でした。

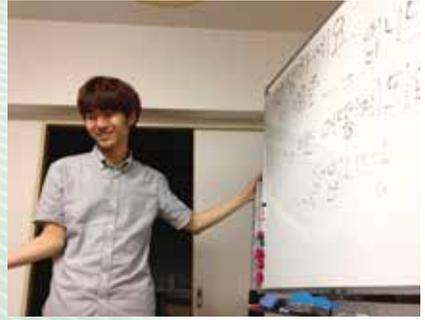


空家をシェアハウスに有効活用

◆はじまりは、留学生の生活支援

さらに、私たちは「シリキリヤ」という事業も展開しています。不要となった家財道具を回収し、留学生へ無償提供する活動を平成26年春にCASから引き継いだ事業です。留学生の「住まい」を提供するとともに、留学生生活のスタートアップも支援しています。この事業を担当する尾崎氏は、家財道具の運搬にとどまらず、自転車の修理やアルバイト先の紹介など、生活全般の相談役もこなしてい

韓国語教室



留学生による英語教室

ます。留学生からの信頼と感謝は絶大なものです。

現在では、松山市道後エリアを中心に、4棟19室を運営しています。おかげさまで、いずれもほぼ満室の状態を維持しています(平成26年11月現在)。ただ、シェアハウス運営をしていく中で、さらなる地域の課題も見えてきました。

◆シェアハウスが地域課題の解決策

そのひとつは、空き家の問題です。ご存知の通り、平成25年実績で愛媛県の空き家率は全国で2位という状況です。実際に、不動産仲介業の方々からは、今までにない中古物件の多さと不動産価格が下落していく状況を耳にします。同時に、景観の問題、防犯の問題、災害対策の問題など、空き家にまつわる地域の課題は山積みです。

それとともに、地域コミュニティの希

薄化も実感します。物件をご紹介いただく際に、その物件に住まわれた方々の歴史を、大家さんから伺うことがありますが、築50年以上ともなると、その当時の地域の活気が、現在の静けさとあまりにもかけ離れていて想像すら難しい時もあります。しかし、そこには間違いなく「人と人のつながり」があったはずで、でなければ、目の前の建物が存在しないことになりません。その活気をそのまま取り戻すことはできませんが、「新たな人と人のつながり」なら作れるかもしれない。「シェアハウス」という場の可能性は、今まさに必要とされていると感じています。

◆留学生と地域が繋がり、学び合う場

そうした中、シェアハウスの住人と地域の方々との交流を目指し、「コ・ラーニングタイム(Co-Learning Time)」という、語学教室やヨガ教室を企画したり、「ワールドシェアキッチン(World Share Kitchen)」という、住人による母国の料理を振る舞う機会を作っています。いずれも現在のところ収益事業としては成り立っていませんが、継続していくためにも、事業化にチャレンジしていきたいと考えています。

また、3・11以降、地域防災の意識

が高まる中、留学生を含めた外国人の防災訓練の必要性も感じています。国によっては地震そのものが未知という状況の中、どのようなアプローチをしていけば地域防災の中で彼らを守るのか現在も模索中です。平成26年10月、11月には地域に住む外国人に向けて「シェルターライフデザイン(Shelter Life Design)」というイベントを開催しました。

こうしたことをきっかけに、今後も外国人と地域住民との「橋渡し」ができたかと考えています。目指すのは、「愛媛の留学生支援といえばSLD、シェアハウスといえばSLD」と多くの方に認識してもらおうようになること。やるべきことは山積みです(笑)。



地域の方とシェアハウスでそうめん流し